

1997年『春雨物語』現代語訳

しもつけ

下野の那須野の原に日入りたり。小猿・月夜
小猿・月夜が
下野の那須野の原に日が沈んだ。

いふ。「この野は道ちまたにて、暗き夜には迷ふ
言ひ。「この野原は道が多く分かれていて、
暗い夜には(道に)迷う」

ごと、すでにありき。ごごにしばらく休みたまへ。
言ひ。「これまでにあった。
お休みください。」

ア あない見てごむ」とて、走りゆく。殺生石とて、
走っていく。
殺生石といつて、
(道の)様子を見て来よう。「と云つて、

毒ありといふ石の垣のくづれたるに、火切りて
(焚噲は)火を起こして
毒があるという石の垣が崩れている所で、

たきほごらしをる。僧一人来たる。目も落とさずで
(座っている焚噲の方へ)視線も向けないで
盛んに焚き木を燃やして座っている。僧が一人来た。

過ぐるさまにくし。「法師よ、物あらばくはせよ。
通り過ぎる様子は(焚噲にとつて)憎らしい。(焚噲は)
「法師よ、食べ物があるなら、(俺に)喰わせ

旅費あらばおきてゆけ。むなしくは通れじ」と
何も差し出さないならば、通すつもりはない。「と
よ。旅費があるなら、置いていけ。

いふ。法師立ちとどまりて、「ごごに金一分あり。
言ひ。僧は立ち止まって、
「ごごに金一分がある。」

とらせむ。くふ物は持たず」とて、はだか金を焚噲
食べ物は持っていない
と云つて、何にも包んでいないお金を焚噲
くれてやろう。

が手に渡して、振り返もせずゆく。「ゆく先にて
振り返りもせずに行へ。
(焚噲は)「この先ご、
の手に渡して、

若き者ら二人立つべし。ウ 『焚噲に会ひて物おくり
『焚噲に会つて物を渡した』
若い者たちが二人立っているはずだ。

し』とごごして過れよ」とらふ。「お」と答へて、足
言ひ「お」と言ひ、「お」と答へて、足音
言ひ「お」と言ひ

しづかに歩みたり。片時にはまだならじと思ふに、
静かに歩い(てい)た。「まだ一時間は経っていないだろう」と思う時刻に、

僧立ち帰りて、「樊噲おはすか。我、発心のはじめ
僧が引き返してきて、「樊噲はいらっしゃるか。私は仏道に入ったところから

より偽りいはざるに、ふと物をしなくて、いま一分
嘘を言っていないのに、ふと物を惜しんで、もう一分

残したる、心清からず。これをも与ふぞ」とて、
残したままなのは、心が清らかでない。これをも与えるぞ」と言つて、

取り与ふ。手にすゑしかば、エただ心さむくなりて、
取り出して与える。(樊噲は自分の)手に置いたところ、ひたすら心が寒くなって、

「かく直き法師あり。我、親・兄を殺し、多くの人
「このように真つ直ぐな法師がいる。(それに比べて)私は、親と兄を殺し、多くの

を損ひ、盗みして世にあること、あさましあさま
を傷つけ、盗みをして世の中で生きていくこと、ほとほと驚き呆れたことだ

し」と、しきりに思ひなりて、法師に向ひ、「御徳
と、強く思いを改めて、法師に向かって、「(あなた様の)恩徳に

に心あらたまり、今は御弟子となり、行ひの道に
(触れて)心が改まり(ましたので、いまは)あなた様の(弟子になり、 仏堂に

入らむ」といふ。法師感じて、「いとよし。来よ」
入るつもりだ」と言ひ。僧は感心して、「大変良いことだ。来なさい」

とて、つれだちゆく。小猿・月夜、出できたる。
と云つて、連れ立って行く。小猿と月夜が 出できた。

「おのれらいづこにも去り、いかにもなれ。我は
(樊噲は)「おまえの(は)いづこにも去り、どのようにもなれ。私は

この法師の弟子となりて修行せむ。オ襟もとの風、
この僧の弟子となって、 仏道修行をしよう。襟元の風(のようなお前たち)

身につくまじ。また会ふまじきぞ」とて、目おこせ
は、(私の)身(の側)に付いてはいけない。もう会わないつもりだぞ」と言つて、視線を送つて

て別れゆく。

「無益の子供らは捨てよかし。

懺悔ざんげ

別れていく。

(僧は)

「(仏道の)

役に立たない子供たちは、捨てなさいよ。

懺悔は

ゆくゆく聞かむ」とて、先に立ちたり。

道すがら聞かむ「と」言つて、先に立ち去つた。